



吉岡まさみが、新しい作品シリーズを開始した。《puzzle》22 点が画廊の壁面を飾る。スクエアの画面にはある一定の法則に基づいて区切られ、彩色されている。22 点、同じ色はない。似て非なる作品である。こうなるとその法則や類型を見つけ出し、パターンを解読して作品の本質に迫ろうとしてしまうが、私はしない。それはこの作品の本質を示している訳では決してないからだ。この作品の本質とは何か。その前に、この作品は「絵画」であろうか。少なくとも近代に分類され制作されている「絵画」ではない。もしかしたら、原始美術における壁画に近いのかも知れな

い。しかし原始美術の真実を私はまだ解明していないので、確かなことはいえない。「絵画」ではなければ何か。立体、彫刻が、写真、映像が、パフォーマンス、演劇/ダンスが、文学、詩が、音楽が。何れにも当て嵌まりながら異なる。ここには、時代に揺るがない芸術の本来の姿がある。芸術の本来の姿とは人間が含まれるかにかかる。ここには百人百様の人間がいる。見る者はそこに、自らや愛する人の姿を思い浮かべる。だから購入する。作品は完売した。人間は芸術なのである。だから生きるためには芸術は不可欠だ。そんな当たり前のことを理解することが困難な時代だ。

